

おでこの話

蜜瀬かえで 著

ある日の休日。

玉置の家で。

わたしが数学の宿題とにらめっこしている姿を隣で描いてた玉置が言った。

「――未佑ってさあ……」

「？」

顔を上げると、じっと見つめてくる玉置と目があつて。

「おでこキレイだよね」

突然、これまで言われたこともないふうに褒められて。

「……………へ？」

反応に困った。

「……」

手のひらをやって、見えないそこへ視線を動かしてはみるけど、

「そうなの？」

よくわからない。

「あたしもよくわかんないけど」

玉置もよくわかってなかった。

「でも、なんとなくそんな気がするんだよね」

「褒め言葉、だよね？」

「うん」

「ありがとう？」

「どういたしまして？」

……うーん。

お互いよくわかんないせいで、なんか、ふわっとした感じで、そろって首を傾げてしまう。

「じゃあさ」

「うん」

「近くで見えていい？」

「別に、いいけど？」

言ったら、玉置が顔を寄せてきた。

テーブルに両手をついて、

「前髪ちょつとよけて」

「こう？」

シャーペン置いて、両手で前髪を左右に分ける。

「……ふむ」

そうしてじいっと、わたしのおでこを見て。

「……」

自分のおでこにも手をやってみて。

「うーん」

見比べるみたいにして、いきなり、こっん

……え？

それまで何ともなかったのに、

わたしの額に、玉置の額が当たっていて、

熱を測る時みたいにして、

目線が完全に一致してて、

「――！」

認識したとたん頬にきた。

「……あの、ちよっと、玉置？」

「ん？」

目が文字通り目の前だったから、目線だけでも斜めに反

らしつつ、

「……さすがに、これは……恥ずかしい」

と言うのでさえ、なんだか恥ずかしかったけど、

言ったら、

「……あ」

やっと気づいた玉置は、

「――！」

ずささつ、って勢いで身を引いて畳にひっくり返りなが

ら、

「ち、ちがうの！ そうじゃなくてっ！」

なんて、あわて出すのを。

「むー」

わたしはじっとした目で見るのでした。